

妹尾治人

私は、冬の寒さの纏んだある日、佐方川河口付近から、榎の浦大橋付近までの海岸を足向くまま歩いてみた。

極楽寺を源流とする佐方川は、長さが約五キロ程の小さな川である。昔、佐方の平地全体が入江で、『狭瀬』から佐方の地名が生まれたという説もうなずける。

佐方川は、八幡神社から流れ下って河口まで真直ぐである。その上、天井川である。これは佐方川が人工川であるという証左と言える。

昔は、河野寺辺りまで鴨が沢山見られたようである。鴨原の地名が生まれたのも、その故であって、佐方の平地は、多くは葦の茂る湿地帯で、だから鴨が住み安い環境であったようである。佐方川に架かるJR踏切が、鴨原踏切と呼ばれているのも当を得たものといえる。

鴨原踏切から、川筋に従って下って行く。

佐方川に架かる、国道2号線の『桂橋』を渡ると、河口はもう近い。

さらに佐方川の右側を下ると、廿日市高校で、川向こうは佐伯区美の里。この辺りになると河口特有の干潟が現れる。

干潟には、アオサギ・シギ・チドリが、水面にはヒドリガモが、コカイやハコガニなどの干潟の小動物を餌にして、せせと啄んでいる。そして少し沖を見やると、沖合の漁船の船べりに、川鵜が二羽、のんびり止まっていた。河口を過ぎて、廿日市中学校を右に見ながら海岸を行くと、廿日市港の運河に入る。

目の前には、木材港北の岸壁と廿日市大橋がせままる。河口から一・五キロ程で廿日市港

に到着する。

廿日市港のその昔は、昭和四十年頃まで、能美島への連絡船が通っており、また、当時は、魚の水揚げ・だるま焼耐用の甘藷の水揚げが盛んで、港も大層賑わっていたと聞く。今は、その面影は全くなく、三十隻ほどの漁船が繋がり、人影は少ない。

廿日市港が、国道2号線と接するあたりを、左折して、住吉神社を右に見て、港の西の海岸沿いに沖に向かって進む。そこに木材港の案内板が立っている。

そこを、なおも左折して進む。黒松の並木道を行くと、プレジャーボートの繋留桟橋が何本も設置されている。桟橋を数えて見たら十八本もあった。

港から歩くこと、約一・五キロで廿日市大橋西詰めのマリン公園に到着する。

公園は広々として、人気のないベンチが寂しい。公園の若い樹木は、まだ弱々しく、手入れの届かない公園の雑草は、わがもの顔に伸び放題で、大盛況していた。

公園から、海岸を離れて、舗装道路を西に進む。

北港工業団地、八十七社の企業の林立する団地の、ど真ん中を走る広島南道路を行くと、やがて右に、小田億フアインズ、左に、キリン木材の巨大建築物が見えてくる。その交差点を左に曲がると、突き当たりは道が切れ、海に落ちる。北港団地の中で直接、道が海と接するのは、ここだけである。そこで海を覗ける場所に行き、晴れた海面を見渡す。

その海面は貯木場になっており、アオサギ・カシラダカ・セキレイ・オナガガモが見られた。少しばかり貯木場の沖合の柵には、川鵜が沢山並んでいるのが見られた。

川鵜は、夜行性である。昼間は日向ぼっこなのか、羽を広げたり、縮めたりして休んで

いる。川鵜の姿は、のどかで、そして何故か悲しい。

運がよければ、ボラの子のイナの群れが、湖に乗って遡上していくのが見られることがある。

沖の川鵜と別れて、紀陽の工場を左に見ながら、先ほどの交差点まで後戻りして、左に折れて再び西に向かう。やがて右手に住吉の土手が見え、下水処理の中間検視場の建物あたりを過ぎて、橋にかかる。この橋は、可愛川の一番下流に架かる橋で、榎の浦大橋と呼ばれている。また、この橋は、木材港の北と南を結び、今では広島南道路の要衝で、交通量が次第に多くなっている。昭和五十一年三月十日に完成した。廿日市大橋が平成十三年八月十日に開通しているから、二つの橋が連携するまでに、二十七年の歳月を要している勘定になる。



この榎の浦大橋一つ上流の、榎の浦南橋付近で、何人か知らぬが撒き餌をしていて、その撒き餌を狙ってカモメが、カモ・ハトまでが、数百羽群れていた。その様は、壮観というか、実に異様な風景である。

佐方川から榎の浦大橋まで、散策した距離は、約六十キロ。歩く度に、日ごころ気がつかぬ、いろいろなお出合いがあり、発見があった。

(自然観察指導員)

湖ゆるみ 大橋間近に 水鳥見ゆ